

みすえて、

「光一、ここへおいで」  
と、きつい調子でいきました。  
わたしは、立ちあがって、おそるおそる母のそばへゆきました。と、たちまち、くびねっこをおさえてかがまされ、半ズボンを下にすりおろされ、臀をむきだしにされました。同時に、母の叱声(しごき)がわたしの頭上におちてきました。

「六つになって、粗相(こま)をするなんて、なんてことです。それに、なぜ、おかあさんにかくしていたの！」

びしゃりと、母の手のひらがわたしの臀を打ちました。つづいて、二度、三度……数度ほども、しりを打たれたのです。

痛さは、さほど感じませんでした。それよりも、美しい母の手で、しりをむきだしにされたことのはずかしさが、わたしには、たまりませんでした。

が、そのはずかしさのなかに、からだじゅうがうすくよくなごころよさを覚えていま

した。

そして、それに加えて、二度めほどのしりうちから、打たれるたびに、身ぶるいするよくな妙な快感が、わたしを襲ったのです。わたしは、心のうちに、この体罰が、いつまでもつづくことを願いました。が、急に母の打つ手がとまったのです。「おしっこ出たいのね?」

と、母がいました。きつと、そのとき、アサガオのつぼみのような、まっしろい小さなわたしのちんちんは、快感のために、怒っていたのでしょうか。それを母はみつけたのです。「そんなだから、おねしょをするんです。ご

はんの前におしっこをするの。さあ、いってらっしゃい」

もう、いつもの、愛情のこもった、やさしい調子の声にかわってしまいました。それから数日たったころ、わたしはまた、夜尿をしました。

こんどは、わざとそれをしたのです、母から臀うちをされたために……

そのことは、女中から母に伝わり、わたしは望みどおり、ふたたび、母のスパンクの罰をうけることができました。

子供ごころのあさはかさで、わたしは性懲りもなく、三たびそれをしました。が、利口な母は、そのときはじめて、わた



しのようすに、なにかを感じたのでしよう。それからは、わたしが夜尿をするとしりうちをやめて、わたしに食事(しょくじ)を一回抜(ぬ)かす罰(ばつ)をあたえるようになったのです。

### 父との入浴

父は、わたしに目のないひとでした。中年になってはじめてもった、ひとり子のわたしを、ネコかわいがりにかわいがり、わたしがどんないたずらをして、叱りもしなければ、まして、体罰を加えるようなことは、いちどもしたことがありません。

かれは、入浴するときに、三度にいちどくらしいは、わたしといっしょにはいるのです。そして、わたしのからだじゅうを、大切な珠



玉でも洗うように、ていねいにゆっくりと洗ってくれますが、わたしは、けっして、おとなしく洗わしてはいませんでした。

それは、子供ごころにも、父の甘さをバカにしていたからでもあり、また、父のおおき

なからだにたいする劣等感からの虚勢(むせい)でもあったようです。つまりは、いずれにしても、父の愛情にあまえていたのですしょう。

父にからだを洗ってもらいながら、わたしは、父の広い胸板を、力いっぱいいついてみた